



中国における学校から職業への移行

呉 喆 人

概要 中国では、失業、特に若年層の失業と工場労働力不足という矛盾な現象が併存している。中国全土で行った独自の「若者の生活と進路に関するアンケート」の個票データを用いて、本稿は大卒就職難の影に隠された中低学歴者の学校から職業への移行に注目する。調査及び分析結果は以下の内容を示した。(1)学業成績と在学中の学習態度、社会的適合度、若者自身のネットワークは就職の成功に寄与する、(2)仕事に対する高い期待（例えば正規フルタイム労働を目指すこと）は失業に繋がる、(3)学校側の就職支援が学生の就職への有意な影響が確認されず、学校の就職支援への取り組みが不十分である可能性がある。

キーワード 学校から職業への移行、社会的適合度、ネットワーク、就職支援

原稿受理日 2014年10月9日

Abstract Currently in China, there is an especially high level of youth unemployment that coexists with a conflicting phenomenon, the shortage of workers in companies. Using a unique internet base survey of the Chinese Youth, this study sheds light on the school to work transitions for those who only have a high school education. We find academic performance, social skills and the network of the youth contribute to their success in the job market immediately after school. The results also show that those unemployed people may have high expectations (for example, towards finding a regular full-time job) during their job search. Moreover, we find job placement services at school have little effect on the school to work transition.

Key words School to Work Transition, Social skills, Network, Job Placement

1. はじめに

2003年以降、中国の大学進学率の急激な上昇に伴い、大学卒業者の就職難が浮上し、たくさんの注目を集めた。一方、大学に進学できなかった若者の就職に対する関心が少ない。これは中国政府の失業統計と関係する。中国国家統計局が公表している失業率が「都市登録失業率」である。つまり、農村戸籍の失業者と失業登録をしていない者はその失業統計に含まれない。大学に進学できなかった若者の中に農村戸籍者が多い、その上低学歴者の雇用の流動性が高いため、失業保険に加入せず、失業しても登録しない者が殆どである⁽¹⁾。

また、近年、中国では人手不足と失業が併存している (Liu, 2012)。2004年初めから中国の製造業を始めとする多くの業界で労働者の確保が厳しくなった。2005年頃、労働者の不足は内陸部に拡大し、中国全土で人件費が右肩上がりて上昇を続ける (日本経済新聞社, 2013)。このような労働集約型産業の人手不足を背景に、中等教育しか受けていない若者の失業問題が問題視されていない。

本稿は高卒・高校中退者を対象に、中国の若者の学校から職業への移行を調べる⁽²⁾。図表1は中国の高校卒業生数と大学募集人数の推移を示している。普通高校の卒業生数が2000年の301.5万人から2012年の791.5万人へ増加した。2005年以前の職業高校卒業生数の統計データがないけど、増加している傾向が分かる。大学・短大の募集人数が年々増加しているが、普通高校と職業高校の合計卒業生のうち、半数以上は進学しない/できない (列⑤)。すなわち、毎年高校を離れて社会に流れる若者の数は700~800万人程度に達している (列④)。彼らの就職実態を把握することが重要である。

本稿は大阪大学社会研究所が2009年に中国全土で行った「若者の生活と進路に関するアンケート」調査に基づき、若者の学校から職業への移行を分析する。特に、学校での学業成績、社会的適合度、ネットワークが就職に与える影響に注目する。筆者はほかの研究者との共著論文 (Ariga, Ohtake, Sasaki, Wu, 2012) で就職と転居のジョイント意思決定及び賃金成長に注目し、様々な実証分析を行ったが、紙幅の都合で数多くの情報を割愛した。本稿はその研究の補足でもある。

(1) 農村戸籍者が大学に進学すると、戸籍が都市戸籍になり、失業統計の対象になる。

(2) 中国統計局によると、2009年中国の中学校・職業中学校の卒業生数対同年普通高校・職業高校の募集生数の比率が94.3%であり、その後も95%以上の高い水準を維持している。ほとんどの中卒生が進学しているため、本論文は中卒の若者を分析対象から外す。

中国における学校から職業への移行（呉）

本稿の構成は以下の通りである。第2章は独自のアンケート調査の単純集計の結果に基づき、中国若者の学校から職業への移行概況を見る。第3章は分析で使う変数とその記述統計を説明する。第4章はロジット分析を行い、最後、第5章でまとめる。

図表1 高校卒業生数と大学募集人数の推移

年	①普通高校卒業 者数(万人)	②職業高校卒業 者数(万人)	③大学・短大募 集人数(万人)	④=①+②-③ (万人)	⑤=④/(①+ ②)
2000	301.5	—	220.6	—	—
2001	340.5	—	268.3	—	—
2002	383.8	—	320.5	—	—
2003	458.1	—	382.2	—	—
2004	546.9	—	447.3	—	—
2005	661.6	418.2	504.5	575.3	53.3%
2006	727.1	479.1	546.1	660.1	54.7%
2007	788.3	530.9	565.9	753.3	57.1%
2008	836.1	580.7	607.7	809.1	57.1%
2009	823.7	625.2	639.5	809.4	55.9%
2010	794.4	665.3	661.8	798	54.7%
2011	787.7	660.3	681.5	766.6	52.9%
2012	791.5	674.9	688.8	777.6	53.0%

出所：中国統計年鑑（2001～2013）

2. 「若者の生活と進路に関するアンケート」とその概要

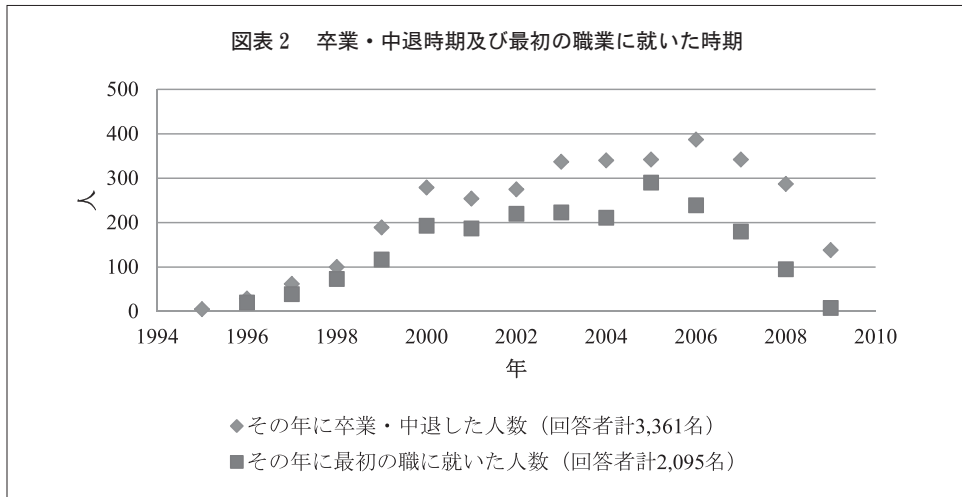
本稿で用いるデータは大阪大学社会研究所が2009年に行った「若者の生活と進路に関するアンケート（中国）」というデータである。調査対象は1999年（1996年）以後高校（中学校）を卒業、あるいは中退し、その後大学に進学しなかった者である。調査期間は中国の旧正月に合わせて2月と3月にした。全国範囲で報償付きのインターネット調査を行った結果、合計4,038人から回答を得た。そのうち、普通高校卒は1,200人（29.7%）、職業高校卒は1,742人（43.1%）、普通高校あるいは職業高校の中退者は784人（19.4%）、中卒者は312人（7.7%）である。中国統計年鑑のデータを用いて計算した高校中退率と中学校から高校への進学率の近似値と比較し、本調査は大きな乖離がない⁽³⁾。調査では卒業・中退の

(3) 中国統計年鑑のデータを用いた近似値の計算式は次の通りである。

高校中退率 = (普通高校と職業高校の募集者数 - 3年後の卒業生数) ÷ 普通高校と職業高校の募集者数。

中学校から高校への進学率 = 中卒者数 ÷ 普通高校と職業高校の募集者数。

年、その後の職歴や転居歴、在学時の成績、勉強・娯楽時間、交友関係、家族情報など様々な項目について質問した。



出所：「若者の生活と進路に関するアンケート（中国）」より筆者作成（以下同）

図表2は各年に卒業或いは中退した人数とその年に初めて就職した人数を示している⁽⁴⁾。どの年でも卒業・中退者の人数が初職に就いた人数を上回る。両者の間のギャップが拡大し続けている。2008年時点のデータを見ると、卒業・中退者の287人に対し、初めて仕事に就いたのが95人（33%）しかいない。初職に就いた者の中に、往年の卒業・中退者が含まれているため、実際の新卒失業率ももっと高いはずである。

図表3によると、3,366名の回答者のうち、14%が卒業・中退後一度も就職したことがない。63%が転職した経験があり、4回以上転職した（5つ以上の会社に勤めた）者が全体の7%を占める。初職の雇用形態をみると（図表4）、常用フルタイム労働者（日本の正社員相当）は全体の56%に過ぎず、4割以上が臨時労働者（契約社員相当）やパートタイム労働者である。大学に進学できなかった若者たちは低い就職率と非常に不安定な雇用状態を直面していることが分かる。

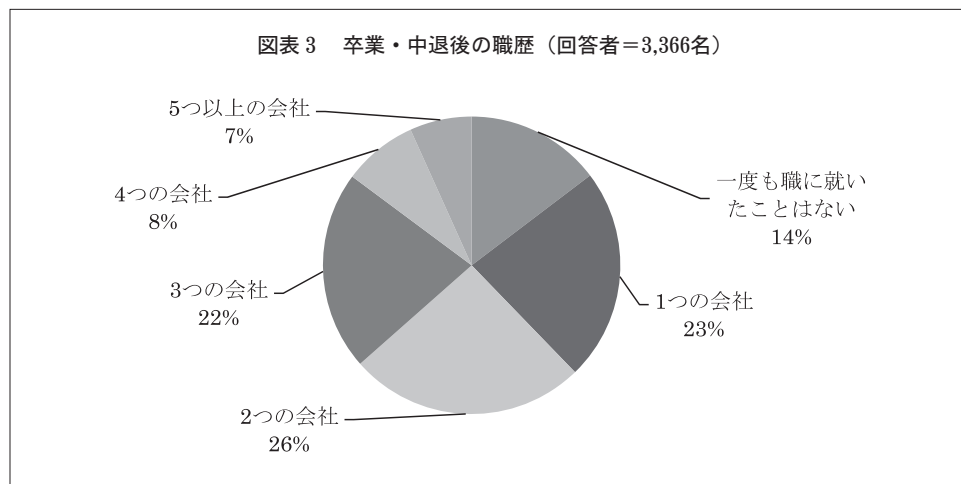
図表5は就職経路を示している。2,290名の回答者の内、54.8%が一般応募で最初の就職を決めた。37%が親や自分のコネで就職した。ネットワークの効果が大きい。一方、日本

(4) 調査対象は96年以降の卒業・中退者であるが、95年に卒業したと回答した者が5名いる。ほかの回答項目と合わせて判断し、回答ミスのサンプルを次の章の分析から外した。

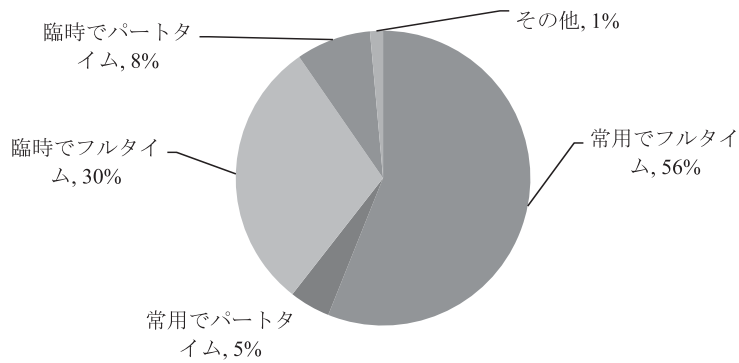
でよくある学校や職業安定所の就職斡旋の効果が限定的である（5.2%）。

最初に就職した職業の企業形態を見ると（図表6）、半数近くの若者は私営や民営企業で最初の就職を決めた。国有企業や学校等の事業単位（institutions）と比べ、これらの企業は雇用が多い、ハードルが低い、権利保障も少ないという特徴がある。

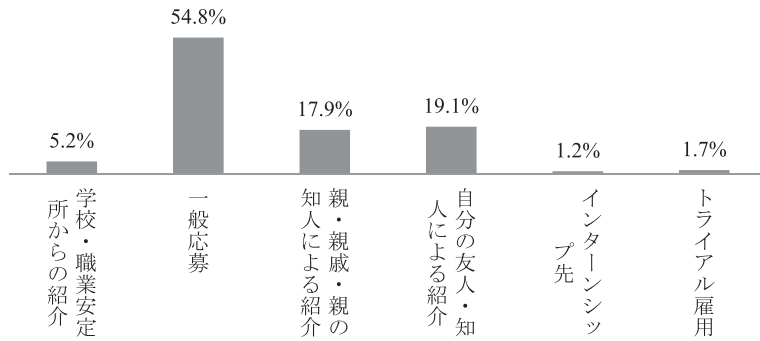
図表7の所得分布を見ると、62.9%の人の月収は1,000元（99年の為替レートで約13,760円）未満である。月収3,000元以上（2000年以降の沿海部の大卒初任給に相当する水準）の割合は1.4%程度に留まる。当初の就職理由を尋ねると、「給料が良いから」という理由で就職した者は全体の18.5%に過ぎず、自分の希望職種（30.3%）や技能習得目的（25.2%）で就職した人より少ない（図表8）。第1章で述べたように、近年中国で人手不足と失業現象が併存している。特に80年代や90年代に生まれた「80後」「90後」労働者は、権利意識や職業に対する期待が高く、仕事に対する忍耐が低いという特徴を持っている。日本の中高卒者と同じ、彼らは単にお金のために仕事をするのではなく、キャリアアップや人生を楽しむことを目指している。しかし、若者の高学歴化が急激に進行したことで、従来中高卒者が行っていた仕事に、短大・大卒者が就くようになる。それが中高卒者の就職困難に拍車をかけている。



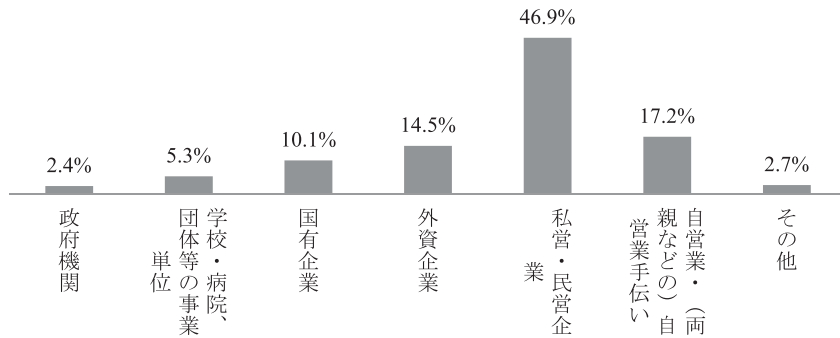
図表4 初職の雇用形態（回答者=2,677名）



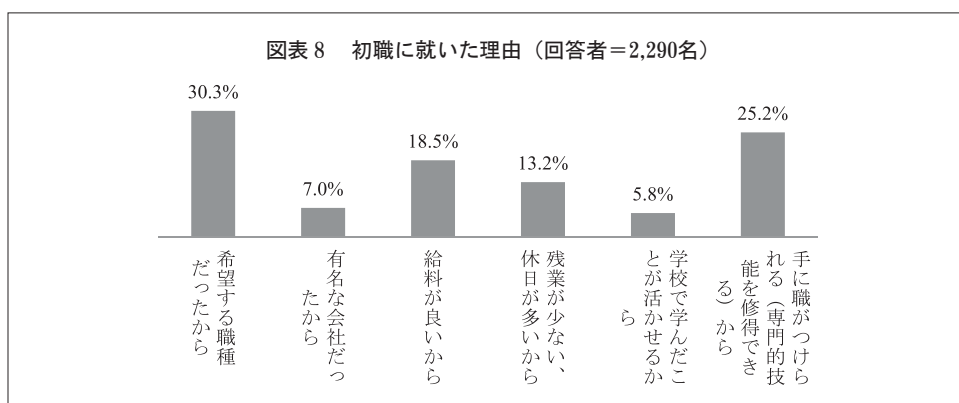
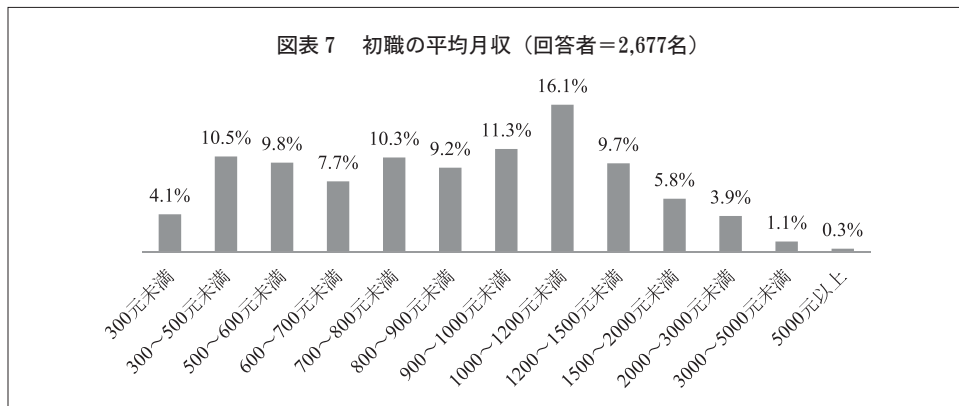
図表5 初職の就職経路（回答者=2,290名）



図表6 初職の所属企業の種類（回答者=2,677名）



中国における学校から職業への移行（呉）



3. 分析で使うサンプルと変数

本稿では個人・学校・家庭・地域要因が学生の学校から職業への移行にどのような影響を与えるかを分析する。具体的に、高校卒業・中退の翌年までに回答者が就職できたかどうか、就職できた場合、常用フルタイム（正規雇用）であるかどうか注目し、ロジット分析を行う。調査が2009年に行ったため、2008年以降に卒業・中退した者に限り、1年半の間隔を取らず、調査時点までの就職状況からダミー変数を作る。また、本調査で中卒者のサンプル数が少ない。全国範囲でも中卒者の高校への進学率が90%後半という高い水準に達している。中卒者と高卒者の異質性を考慮し、中卒者を本研究の実証分析から外す。その他、病気、受験準備（浪人）、家庭事情等の理由で調査時まで一度も就職したことがないサンプルをドロップする。このように、最終的に分析で使うサンプル数は2,663である。そのうち、普通高校卒が全体の28.69%を占め、職業高校卒（50.28%）よりはるかに少ない（図表9）。中退者（21.3%）について、普通高校と職業高校の区別ができないが、

図表9 学歴別の雇用形態、卒業・中退の翌年までに就職できた者の就職経路

就職経路	普通高校卒 (N=764, 28.69%) (うち就職できなかった者26.57%)				職業高校卒 (N=1,339, 50.28%) (うち就職できなかった者21.51%)				中退者 (N=560, 21.30%) (うち就職できなかった者29.10%)			
	常用フルタイム (38.48%)		非常用フルタイム (34.95%)		常用フルタイム (45.48%)		非常用フルタイム (33.01%)		常用フルタイム (37.86%)		非常用フルタイム (33.04%)	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1. 学校・職業安定所からの紹介	14	4.76	23	8.61	49	8.05	31	7.01	18	8.49	13	7.03
2. 一般応募	171	58.16	137	51.31	335	55.01	218	49.32	105	49.53	84	45.41
3. 親・親戚・親の知人による紹介	50	17.01	54	20.22	103	16.91	91	20.59	39	18.4	42	22.7
4. 自分の友人・知人による紹介	51	17.35	46	17.23	109	17.9	85	19.23	43	20.28	37	20
5. インタベンションシブ先	3	1.02	2	0.75	8	1.31	9	2.04	5	2.36	3	1.62
6. トライアル雇用	5	1.7	5	1.87	5	0.82	8	1.81	2	0.94	6	3.24
合計	294	100	267	100	609	100	442	100	212	100	185	100

一部の職業高校では進学コースと就職コースの区別がある。回帰分析の際この情報を使う。

学歴別の就職状況をみると、職業高校卒の若者が労働市場で一番有利である。卒業の翌年までに就職できなかった比率が21.51%であり、三つのカテゴリー中一番低い。常用フルタイムの比率が45.48%に達し、一番高い。職業高校では、普通科目が少なく、専門教科に属する科目の授業数が多い。一般入試による大学受験は、一部を除き不利であるが、就職の際は学校で学んだ知識がすぐ応用できるため、学生が即戦力になり、企業に歓迎される。一方、中退者の無職率が一番高い(29.1%)、常用フルタイムの雇用の比率が一番低い(37.86%)。中退者は根性や頑張る意欲に欠けている可能性があり、学業継続に困難があっただけでなく、その後の職業にも不利益を与えることが考えられる。

就職経路について、普通高校卒の「一般応募」比率が三つのカテゴリー中で一番高い、逆に「学校・職業安定所からの紹介」「自分の友人・知人による紹介」「インターンシップ先」の比率が一番低い。大学進学を最大の目標とする普通高校では、学校側の就職斡旋が少ない、友人や先輩も進学して社会人になる比率が低く、紹介してもらえない、さらに受験勉強がメインであるためインターンシップに参加する可能性が低いと考えられる。これらの要因は普通高校の新卒者の比較的高い無職率と低い常用フルタイム雇用率にも寄与するであろう。

また、非常用フルタイムの雇用と比べ、常用フルタイム雇用の「一般応募」の比率が高い、「親・親戚・親の知人による紹介」の比率が低い。コネ社会と言われている中国で、企業利益に直接影響を与える人材採用において、「コネ」は疑いなく重要であるが、それには限界もある。

図表10は実証分析で使う説明変数とその記述統計をまとめている。使う変数が多いため、A) 個人属性と高校での過ごし方、B) 高校の指標及び学校側の就職斡旋、C) 家庭的属性、D) 地域的属性に分けて説明する。

A) 個人属性と高校での過ごし方

まず年齢、性別、学歴など一般的な個人属性を見る。サンプルの年齢のバラツキが大きい。卒業・中退時の年齢を見ると最年少者は15歳、最年長者は28歳である。一部の回答ミスが存在する可能性を否定できないが、中国、特に貧しい内陸農村部で児童の小学校入学年齢のバラツキが大きい実情を反映している。18.5歳という平均年齢は特に異常がない。性別について、男性が女性より多く、全体の57.8%を占める。男尊女卑の中国で、義務教育で教育を終える女性が男性より多いと、女性の大学進学率が男性より高いと二つの可能

図表10 分析で使う変数と記述統計 (N=2,663)

	Mean	Std. Dev.	Min	Max
A) 個人属性と高校での過ごし方				
卒業・中退当時の年齢	18.535	1.869	15	28
男性ダミー	0.579	0.494	0	1
普通高校卒	0.287	0.452	0	1
職業高校卒	0.503	0.500	0	1
子供の時宿題をいつ頃やったか				
①宿題の完成計画=実施	0.192	0.394	0	1
②(どちらかというと)最初の頃に完成	0.263	0.440	0	1
③終わりごろに完成	0.314	0.464	0	1
④宿題を終わらなかった	0.047	0.211	0	1
高校の講義時間以外に、週何時間勉強したか				
①まったく勉強しなかった	0.059	0.236	0	1
②週21時間以上勉強した	0.157	0.364	0	1
遅刻、欠席が多かった	0.100	0.299	0	1
三年時・中退年の成績, 1=非常に悪かった	3.348	0.877	1	5
班長ダミー	0.133	0.339	0	1
自治会・学校の幹部ダミー	0.152	0.360	0	1
寮生活	0.622	0.485	0	1
下宿, その他	0.029	0.169	0	1
高校時代に付き合っていた人, 有=1 無=0	0.381	0.486	0	1
放課後や週末に次のことをどの程度行ったか?				
1=稀に, 5=ほぼ毎日				
①友達と話をするなど	3.673	1.347	1	5
②家族と話をするなど	2.908	1.265	1	5
③他の大人と話をするなど	2.273	1.163	1	5
④テレビ・ビデオをみる	3.089	1.300	1	5
⑤ゲームをする	2.297	1.328	1	5
⑥スポーツ活動に参加する	2.888	1.173	1	5
⑦部活, クラブ活動	0.634	0.482	0	1
⑧バイト	0.308	0.462	0	1
⑨家業手伝い・見習いをする	0.400	0.490	0	1

中国における学校から職業への移行（呉）

B) 高校の指標及び学校側の就職斡旋				
重点公立	0.357	0.479	0	1
私立学校	0.155	0.362	0	1
進学コース	0.107	0.310	0	1
就職コース	0.160	0.366	0	1
学校の進路指導に参加した = 1				
①進路指導説明会	0.338	0.473	0	1
②職場見学や職業体験学習	0.288	0.453	0	1
③卒業生の就職体験を聞く会	0.369	0.483	0	1
④社会人としてのマナー講習	0.240	0.427	0	1
⑤職業適性検査	0.195	0.396	0	1
C) 家庭的属性				
兄弟				
①一人っ子ダミー	0.286	0.452	0	1
②長子ダミー（一人っ子ではない）	0.289	0.453	0	1
③末子ダミー（一人っ子ではない）	0.284	0.451	0	1
親のパワー				
①親の一人以上が公務員幹部	0.050	0.219	0	1
②親の一人以上が公務員非幹部	0.024	0.153	0	1
③親の一人以上が企業経営者・役員	0.033	0.179	0	1
④親の一人以上が郷村の役員	0.015	0.123	0	1
⑤親の一人以上が病院や学校などの団体の職員	0.085	0.279	0	1
その他の家庭的要素				
①15歳当時の相対豊かさ，0 = 最も貧しかった	5.212	1.842	0	10
②卒業・中退以前に父親が亡くなった	0.014	0.116	0	1
③卒業・中退以前に母親が亡くなった	0.009	0.093	0	1
D) 地域的属性				
①出身地 = 農村	0.635	0.481	0	1
②出身地 = 郊外	0.278	0.448	0	1
③卒業高校所在地 = 農村	0.091	0.288	0	1
④卒業高校所在地 = 郊外	0.784	0.412	0	1

性が考えられる。学歴について、図表9で見たように、職業高校卒の者が就職において有利であると予測する。

これらの個人属性のほか、「子供の時宿題をいつ頃やったか」という質問は回答者の計画性や自制心及び時間の整合性の代理変数であり、「高校の講義時間以外に、週何時間勉強したか」や遅刻・欠席状況と合わせて、学習態度を測る指標になる。学業成績については卒業・中退直前一年の成績を5点法で評価する。予測として、真面目で成績の良い人が就職で有利である。

アンケートでは放課後や週末の余暇時間の過ごし方について詳しく質問した。①～⑥項目は5段階（1＝まれに、5＝ほぼ毎日）で解答してもらった。ほかの人との交流頻度、テレビを通じて社会勉強をしたかどうか、一人ゲームが好きかどうかなどの指標は学生の社会的適合度を測る。「班長ダミー」、「自治会・学校の幹部ダミー」、寮生活や下宿経験、付き合った相手の有無等の変数はリーダーシップ能力や対人能力を測る。予測として、社会適合度の高い人の就職が容易である。

B) 高校の指標及び学校側の就職斡旋

中国の重点公立学校は日本で言う偏差値の高い学校である。重点高校に入学できたことは中学時代の学力が比較的に高い、そして就職ではなく進学を志望した可能性が高いことを示す。一方、私立学校は授業料が高く、公立高校の入試に合格できなかった学力の低い学生が多い。一般的な公立学校と比べ、「重点高校」と「私立学校」はおそらく就職にマイナスの影響を与える。

「進学コース」と「就職コース」の平均値はともに10%台に留まる。普通高校は全般的に進学を目指すためコースを分けない。一部の職業高校は進学も重視し、コースを分けることがある。その場合「就職コース」の学生は職探しにおいて有利であろう。

学校の進路指導について、「進路指導説明会」「職場見学や職業体験学習」などの5つの質問項目に設けた。解答の平均値を見る限り、中国の学校は就職斡旋への取り組みが十分といえない。

C) 家庭的属性

家庭的属性では兄弟の構成、親の職業、15歳時に周りの家庭と比べる相対豊かさ、親との死別の有無等の変数をコントロールする。一人っ子あるいは末子の場合、親に甘える可能性が高いため、就職に不利であろう。親の職業は親のネットワークを測る指標になる。

公務員や役員などの親が一般人より多くのネットワークを持ち、子供の就職の助力になると考えられる。価値観の形成に大切な15歳時点の家庭の裕福度と親との死別の有無は、家庭の教養や挫折を乗り越える能力を測る。

D) 地域的属性

出身地と学校所在地の二つの指標はそれぞれ農村、郊外、市内の三つに分ける。「市内」は情報発信地であり、就職に有利である。郊外は都市と農村の間の地域である。農村部は情報へのアクセスが遅れるだけでなく、差別的な戸籍制度の影響もあり、農村出身者の就職が比較的困難であることを予測する。

4. 分析結果

図表11はロジットモデルによる分析結果をまとめている。列(1)は「高校卒業・中退の翌年までに就職できたかどうか」に関する分析結果である。列(2)は就職できたサンプルに絞り、常用フルタイム雇用を1、非常用フルタイム雇用を0とし、分析した。列(2)では就職できなかったサンプルをドロップしたため、サンプル数が2,663から2,009に減少した。二つの分析とも、前章で紹介した説明変数以外に、回答者の卒業・中退時点の年ダミーを入れて就活時点の景気状況等の要因をコントロールする。

A) 個人属性と高校での過ごし方の影響

まずは年齢、性別、学歴の影響を見る。卒業・中退した時点で年齢が上のほうが就職の確率が高い。一方、年齢は正規雇用に有意な影響を与えない。おそらく永遠に親の加護のもとで生活することができない/したくないという思いで、年長者は理想な仕事ではないとしても妥協して就職する。性別について、一般的に男性は雇用市場で有利であるが、分析結果を見ると、男性ダミーの就職への影響が正であるが、有意ではない。一方男性が常用フルタイムの仕事に就く確率が女性よりも低い。一つの解釈として、若者が3K（きつい、きたない、きけん）労働を敬遠するこの時代で、男性は優位性を失いつつあり、強い力を必要としない肉体労働、例えば繊維や組立などの細かい作業は逆に女性に有利かもしれない。職業高校卒は予測通りに他の教育バックグラウンドの者より就職しやすい。ただし、常用フルタイムの雇用への影響が有意ではない。

学習に関する変数について、計画通りに宿題を完成できた人は計画性があり、常用フル

タイムの仕事に就く確率が高い。嫌なことを後回し休みの終わりごろに宿題を完成した人は常用フルタイムの雇用機会が少ない。少し意外なのは「宿題を終わらなかった」人が「就職できた」確率が高いことである。勉強嫌いな者は早く就職しようとするかもしれない。そのほか、まったく勉強しなかった人の就職確率が低く、成績のよい者の就職確率が高い。それは予測通りである。

社会的適合度に関する項目を見ると、友人とよく話す人、テレビ等をみて社会勉強をする人の就職可能性が高い。ゲームに夢中する人の就職可能性が低い。他人や社会に興味を持てば社会進出したくなり、積極的に就活を行い、就職の可能性が高くなる。一方、ゲーム等の非現実的な世界に興味を持つ者は現実社会や他人への興味が薄く、就職意欲が高くないと考えられる。また、他の大人とよく話した人、自治会・学校の幹部を担当した人が常用フルタイムの雇用に出会う確率が高い。本人のネットワークや組織能力が良い仕事を見つけることに大事である。「下宿」は就職へ負の影響を与える一方で、正規雇用にも正の影響を与える。一見不思議であるが、図表10の記述統計をもう一度確認すると、「下宿、その他」のサンプルで占める割合が2.9%しかない、「寮生活」の62.2%と残りの「実家から通う」の34.1%と比べると珍しい存在である。下宿者の一人暮らし経験は一人で問題を解決する能力を高め、正社員になる可能性を高める。一方、下宿の場合、寮生活よりお金がかかるため、下宿を選んだ者が裕福な家庭で育てられる可能性が高い。その結果、容易に妥協しない、非正社員を含む就職の確率を低める。

B) 高校の指標及び学校側の就職斡旋

「重点公立」の就職への影響はマイナスである。重点公立の学生に進学を目指す者が多いため、再受験にチャレンジし、就活に怠けるかもしれない。「進学コース」出身者は正社員になる可能性が低い。これも期待通りの結果である。

学校側の就職斡旋に関する変数はすべて有意ではない。図表9の就職経路に関する統計も学校側の就職支援が限定的であることを示した。Ariga・Kurosaw・Ohtake・Sasaki (2012) は日本での調査データを使い、学校の進路指導が学生の就職に大きく貢献することを示した。中国の高校は就職支援への取り組みが依然少なく、大きな改善の余地があるかもしれない。

C) 家庭的属性

ほとんどの変数は有意ではないが、「一人っ子」が常用フルタイムの仕事に就く確率が

低い、卒業・中退以前に母親を亡くした者が早く仕事に就くことが分かる。親のネットワークの影響が特に確認されていない。

D) 地域的属性

農村と郊外出身者は卒業後すぐ仕事に就く確率が低い、一方、出身地域ダミーの常用フルタイムの雇用への影響が有意ではない。戸籍による採用差別というよりも、仕事が都市部に集中しているため、農村・郊外の学生が情報へのアクセスが遅れる可能性がある。その上、移動コストをかけて魅力の低い仕事（例えば非常用フルタイム）に就くインセンティブが低いことが考えられる。

分析の結果をまとめると、「就職できたかどうか」について、「有能者が仕事を見つける可能性が高い」という解釈よりも、「仕事したい、妥協できる人が仕事に就く確率が高い」という解釈が合理的である。これは先述の高失業率と人手不足が併存する中国労働市場の現状と一致している。一方、常用フルタイムのような安定的でよい仕事に就くために、計画性や責任感、社会的適合性などが重要である。

5. ま と め

中国の中等教育卒業者の就職難問題は長年大卒就職難の影に隠されている。彼らの就職実態に関する調査も研究も限られている。本稿は、中国全土で行った独自の「若者の生活と進路に関するアンケート」調査の結果を詳しく説明した。製造業などの人手不足が顕在化しているなか、若者の失業率が高い。中高卒者は安定的で将来性のある職業を求め、大卒者と競合し、失敗してしまう。若者は自身の競争力を正確に認識するうえで、理性的に就職活動を行えば就職そのものは困難ではない。また、分析結果によると社会的適合度や若者自身のネットワークが良い就職につながる事が明らかになった。そのほか、学校側の就職支援への取り組みが不十分であることも記述統計及び分析結果から伺える、改善する余地が大きいことを示唆している。

図表11 Logit model による限界効果

- (1) 卒業・中退の翌年までに就職できたかどうか
 (2) 就職できたサンプルを対象に、初職が正規雇用であるかどうか

	(1) 就職できた	(2) 常用フルタイム
A) 個人属性と高校での過ごし方		
卒業・中退当時の年齢	0.031 *** (0.005)	0.0092 (0.006)
男性ダミー	0.0165 (0.018)	-0.0639 *** (0.024)
普通高校卒	0.0206 (0.022)	-0.0105 (0.033)
職業高校卒	0.065 *** (0.022)	0.0184 (0.030)
子供の時、宿題をいつ頃やったか		
①宿題の完成 計画=実施	-0.0246 (0.023)	0.051 * (0.030)
②(どちらかというと) 最初の頃に完成	0.0421 ** (0.020)	0.00679 (0.029)
③休みの終わりごろに完成	0.00495 (0.020)	-0.0532 * (0.027)
④宿題を終わらなかった	0.0607 * (0.035)	-0.0792 (0.054)
高校の講義時間以外に、週何時間勉強したか		
①まったく勉強しなかった	-0.114 *** (0.038)	0.0526 (0.050)
②21時間以上	-0.013 (0.024)	-0.0083 (0.031)
遅刻、欠席が多かった	0.0196 (0.027)	-0.0111 (0.039)
三年次の成績、1 =悪かった、5 =よかった	0.0194 * (0.010)	-0.0046 (0.014)
班長ダミー	0.013 (0.025)	0.0187 (0.033)
自治会・学校の幹部ダミー	-0.0205 (0.024)	0.0805 *** (0.031)
寮生活	0.00975 (0.020)	0.0353 (0.027)
下宿、その他	-0.0958 * (0.054)	0.133 ** (0.066)
高校時代に付き合っていた人、有 = 1 無 = 0	-0.00505 (0.018)	-0.0029 (0.023)

中国における学校から職業への移行（呉）

放課後や週末に次のことをどの程度行ったか？

1 = 稀に, 5 = ほぼ毎日

①友達と話をするなど	0.0176 (0.007)	***	0.00746 (0.009)
②家族と話をするなど	-0.00392 (0.008)		-0.0099 (0.011)
③他の大人と話をするなど	-0.00462 (0.009)		0.0255 ** (0.011)
④テレビ・ビデオをみる	0.0217 (0.008)	***	0.0103 (0.010)
⑤ゲームをする	-0.0289 (0.007)	***	-0.005 (0.010)
⑥スポーツ活動に参加する	0.00704 (0.008)		0.00731 (0.010)
⑦部活, クラブ活動	0.0132 (0.019)		-0.0374 (0.025)
⑧バイト	0.0198 (0.021)		-0.002 (0.028)
⑨家業手伝い・見習いをする	-0.029 (0.020)		-0.0181 (0.026)

B) 高校の指標及び学校側の就職斡旋

重点公立	-0.0465 (0.019)	**	0.00934 (0.025)
私立学校	-0.0278 (0.026)		-0.0188 (0.033)
進学コース	0.0429 (0.026)		-0.118 *** (0.036)
就職コース	0.0255 (0.024)		-0.0161 (0.032)

学校の進路指導に参加した = 1

①進路指導説明会	-0.0216 (0.020)		0.0222 (0.027)
②職場見学や職業体験学習	0.00678 (0.021)		0.0267 (0.027)
③卒業生の就職体験を聞く会	0.0169 (0.018)		-0.0079 (0.024)
④社会人としてのマナー講習	0.0217 (0.022)		0.0115 (0.029)
⑤職業適性検査	-0.00165 (0.024)		0.0329 (0.031)

C) 家庭的属性		
兄弟		
①一人っ子ダミー	-0.013 (0.027)	-0.0899 ** (0.038)
②長子ダミー (一人っ子ではない)	0.0127 (0.026)	-0.0352 (0.036)
③末子ダミー (一人っ子ではない)	0.0285 (0.026)	-0.0255 (0.036)
親のパワー		
①親が公務員幹部	0.00988 (0.037)	0.00407 (0.052)
②親が公務員非幹部	0.00181 (0.053)	0.0808 (0.072)
③親が企業経営者・役員	0.00465 (0.044)	-0.0549 (0.063)
④親が郷村の役員	-0.00227 (0.066)	0.14 (0.085)
⑤親が病院や学校などの団体の職員	-0.0293 (0.030)	-0.0117 (0.040)
その他の家庭的要素の影響		
①15歳当時の相対豊かさ, 0~10, 0=最も貧しかった	-0.00404 (0.005)	0.00279 (0.006)
②卒業・中退以前に父親が亡くなった	0.0234 (0.069)	0.0196 (0.093)
③卒業・中退以前に母親が亡くなった	0.117 * (0.068)	-0.0011 (0.109)
D) 地域的属性		
①出身地=農村	-0.0734 ** (0.031)	-0.0101 (0.040)
②出身地=郊外	-0.0913 ** (0.038)	-0.0046 (0.044)
③卒業高校所在地=農村	-0.00561 (0.036)	0.0483 (0.048)
④卒業高校所在地=郊外	-0.0144 (0.025)	-0.0192 (0.034)
卒業年の年ダミー	YES	YES
Log likelihood	-1,372.25	-1,305.8
Pseudo R2	0.0752	0.054
Observations	2,663	2,009

*は10%有意水準, **は5%有意水準, ***は1%有意水準を各々示している。

参 考 文 献

- [1] Ariga, Kenn & F. Ohtake & M. Sasaki, Wu (2012). Wage growth through job hopping in China. *IZA Discussion Paper No. 7104*.
- [2] Ariga Kenn & M. Kurosaw & F. Ohtake & M. Sasaki (2012). How do high school graduates in Japan compete for regular, full-time jobs? An empirical analysis based upon an internet survey of the youth, *The Japanese Economic Review* vol. 63(3), 348-379.
- [3] Liu Yang (2013). Labor market matching and unemployment in urban China, *China Economic Review, Vol 24*, 108-128.
- [4] 中国国家统计局 (2001-2013). 『中国統計年鑑』 <http://data.stats.gov.cn/>
- [5] 日本経済新聞社 (2013). 『習近平に中国は変えられるか』日本経済新聞出版社.